

お雛さまの孤独

中村 龍介

今年も正月が過ぎると、バレンタインデー、ひな祭り、百貨店やスーパーの店頭は目まぐるしく陳列を替える。毎年、このころになると我が家にお雛さまが来た時のことを想い出す。

もう四十年近く前のこと。転勤辞令を受けた。赴任先は、山口県の宇部市。二人の娘と身重の妻を帯同しての都落ちである。

幼い子供を連れての引越しは大変だったが、何とか会社のアパートに落ち着いた。六畳と四畳半の典型的な2DKだ。六畳間の窓際に小さな廊下があるのが僅かな救いで、そこを荷物置き場にした。

その年の夏、妻は地元の病院にて三女を出産。新しい命が家族に加わった。2DKに一家五人はさすがに狭い。廊下を大整理して新生児用のベッドを置いた。

秋口には、整頓好きの妻のお陰で家の中も漸く居住空間が確保され、何とか様になってきた。そしてお正月。

妻の実家からの年賀状に、三姉妹へのプレゼントに簡単な雛人形を送るとあった。男雛と女雛の入ったガラスケースを想像して待っていた。ところが、松の内も明けたころ巨大な段ボールが届いた。

斜めにしないと玄関口を通らない。やけに長くて重い箱も同時に運び込まれた。六畳間の中央にドツカと腰を下ろした二つの段ボールに思わずため息がもれた。

「このままじゃ寝るところがないぞ」

「少し早いけど組み立てちゃいましょう。あなた、やって」

確かに、ひな壇の組み立てはどうみても男の仕事だ。早速、長い方の箱を開けて中身を取り出す。ブリキを曲げて作った支柱がたくさん出てきた。それに人形を載せる台板。七枚もある。

「おい、七段のお雛さまだぞ。飾る場所があるか」

「困ったわね。家が狭いことはよく伝えてあったのに」

狭い部屋の中を改めて眺めるが、いい知恵は浮ばない。

二時間ほどで骨組みは完成した。後は毛氈の赤い布を掛ければひな壇は出来上がる。待ちくたびれた二人の娘は大きな箱の人形を片端から出して品定めを始めた。

「これ、ウシさん！」

下の娘が牛車を出して畳の上を走らせようとする。

「壊れるからやめなさい。これは触っちゃいけないのよ」

妻が制止するが娘たちは聴かない。それぞれに気に入った人形を取り出してママゴト遊びに興じる。

その夜、布団を敷く段になってハタと困った。寝る場所がないのだ。思案の挙句、窮余の一策でひな壇の向きを替え、壁に向かって置くことにした。すると、階段の裏側のような斜めの空間ができる。そこに私が寝ることになった。

お雛さまは前から見ると優雅で美しいが、裏側はブリキがむき出し。危険を承知で潜りこんだものの足には生傷が絶えない。最後にはズボンを穿いたまま寝る始末。

その後、何度も転居した。海外勤務に伴って、お雛さまも海を渡り、ドイツへアメリカへと旅をした。ドイツでは現地の子供たちに可愛がられ、友好親善の務めを立派に果たした。

お陰で、牛車のウシの角は取れて無くなり、冠者の一人はかつらがはずれた。また、菱餅の一つは行方がしれない。

もう十分活躍したので、三年前の転居時に廃棄することにしていた。が、三女が是非残しておいて欲しいという。

二人の男の子の母親だが、どうしても女の子を産みたいというのだ。その割には三つの大学で英語講師の仕事を続け、日舞や琴を習い、同好の士を集めて読書会を主催するなど、翔んでる主婦を地でいく毎日を送っている。とても出産計画など入り込む余地があるとは思えない。

その三女も今年は三十七歳になる。タメ年のお雛さまは、今トランクルームの片隅で満身創痍の身体を古い段ボールに押し込められて、当てのない引き取り手を静かに待っている。

(了)